

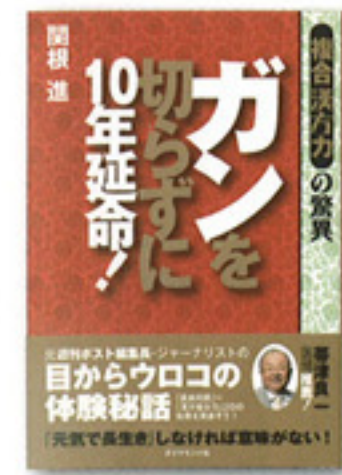


関根 進さん

複合漢方力の驚異『ガンを切らずに10年延命!』  
著者(関根 進氏)インタビュー

# 闘病生活で大切なのは 運と縁をつかむこと

取材・文●宮西ナオ子 フリーライター



ダイヤモンド社刊  
定価1,500円(税込)

『週刊ポスト』元編集長でジャーナリストとしても活躍してきた関根進さんは、現在、スローヘルス研究会の会長でもあり、自ら発行している季刊『いのちの手帖』誌編集長を務め、中国・長春中医药大学大学名誉教授でもある。

関根さんの転機は10年前に訪れた。膵臓がんに次いで難しいとされる食道がんが見つかったのだ。当時の主治医は手術を勧めたが、断固として拒絶。抗がん剤治療と放射線治療を受け退院後、独自の療法を継続して10年間が経過した。そこから導き出したのが、関根さんの最新刊『ガンを切らずに10年延命! 複合漢方力の驚異』(ダイヤモンド社刊)である。

## 悪性の食道の進行がん 手術をしないですむ手はないか

激しい胸のつかえ、嚥下困難の症状に見舞われ、病院に赴いた関根さんに宣告されたのは、悪性の食道の進行がん。1999年1月のことだった。当時58歳だった関根さんは、医師からの告知に強烈なショックを受け、勧められるままに、手術の準備をすることに。

医師は6cmの長さにくれあがった腫瘍を、抗がん剤と放射線治療で半分くらいに小さくしてから手術をする治療計画を告げた。そのときは、がんについての知識などなかった関根さんは、素直に入院。とはいえ入院中に、たまたまノートパソコンで食道がんの治療法を検索すると、手術は100人に20人ほどしか助か

らないほど難しいことを知る。さらに肋骨の一部をはぎ、喉、胸、腹を切り開き、40cmほどの食道を全摘出したうえに、そこに胃袋を食道の代用として喉につなげる手術だと知って仰天する。喉と胃の膜は厚さがかなり違うので、接合が難しく、術後の後遺症や合併症が見られるという。

症状が緩和するのは、2〜3年が経過してから。この間も誤嚥や合併症を起こすことが多いらしい。関根さんは手術に不安を抱いた。「何とかして手術をしないですむ手はないか」……。

幸いなことに奥さんは外科医の娘。また友人のなかには人一倍熱心な薬草マニアもいた。このような人々に支えられ、インターネットとクチコミで漢方薬や健康食品を探しまくり、片端から試してみたといい。

## 複合抗がん漢方薬 「天仙液」との出会い

「がんは情報戦」という関根さんは、職業柄、情報取得は得意だった。病院に持ち込んだノートパソコンを駆使して検索していると、たまたま香港のサイトから複合抗がん漢方薬「天仙液」という漢方薬があることを知った。

これは、中国・吉林省の北朝鮮との国境を挟む霊峰、長白山に生育している朝鮮人参や冬虫夏草など自然のままの薬草を30種類調合した中国政府認可の複合抗がん漢方薬だ。  
特に消化器系のがんによいらしく、抗

## 王振国医師に会い 在宅療法でがんを挑む

退院後の関根さんは、3つの在宅療法を選んだ。1つは、天仙液による「複合抗がん漢方療法」で、中国の東北地方、吉林省通化市に飛び、王振国医師の治療を受けた。

王医師は、治療や健康に対する思いをとうとうと述べる医師で、がん治療の退院後は、自然治癒力、免疫力を高める養生が大切であることを述べ、天仙液を使った天仙液療法を勧めた。関根さんは、素直に取り入れた。

2つめは、漢方煎じ薬を中心とした「ホリスティック療法」。ジャーナリスト仲間が紹介してくれた、ホリスティック医学の草分け的存在である帯津良一医師との出会いから始まった。帯津医師からは、「患者にはさまざまな選択肢のなかから、治療選択の権利があること」を教わり、さまざまな治療方法を組み合わせて、「いのちのエネルギー」を高める知恵を持つことを学んだ。

3つめが、玄米菜食によるマクロビオティックの食養生法である。食箋指導者の山村慎一郎氏から学んだ。このほかに呼吸法、温泉療法、健康食品、ホメオパシーなどを取り入れてきたのだった。

## 闘病生活を基に学んだ 複合漢方力の知恵20

食道がんが発見され、手術を拒んで、



退院後は夫婦でチベット高原などに旅行

がん剤と放射線とを併用すると80数パーセントの治癒率が認められたという研究データがあった。すぐに注文(注・日本では未承認薬なので個人輸入で入手)。製品が届いたときには、すでに抗がん剤と放射線の副作用で嘔吐と下痢に苦しんでいたが、主治医には内緒で飲みまくった。「当時は副作用がひどく、普通のサプリメントは匂いがきつくて飲めなかった。でもこの「天仙液」と、もうひとつの「SOD様食品」だけは飲めたんですね」と関根さん。「SOD様食品」とは、胚芽、大豆、ぬか、ハトムギなどを原料とする粉末で、四国・土佐清水病院の丹羽耕三医師によって開発された健康食品だ。

## 断固として手術を拒否 逃げるようにして退院

2つのサプリメントを飲みつつ、抗が



10年前のがん病棟にて

る「正食力」、食のライフラインにある「食縁力」、「食べるより出す」にある「排毒力」、夫婦二人三脚にある「家族力」、「病院選びにある「医診力」、心のときめき」にある「延命力」、患者の絆にある「患者力」、「あきらめない」にある「希望力」、いのちの複眼思考にある「全体力」だ。

「闘病生活で大切なのは、運と縁をつかむこと。そのためには情報が必要。さらにどのような状況でも希望をもつこと。希望こそ良薬、諦めは毒薬です。もうひとつ大切なのは、「患者力」や「家族力」。人のために役立っている、人から愛されていると実感できる「自己有用感」を感じれば、生きる希望が湧いてくる」と関根さんは、きっぱりと結んだ。

取材協力●漢方健康ネットワーク  
TEL●03(5785)2279

せきね・すずむ  
ジャーナリスト。スローヘルス研究会会長。季刊『いのちの手帖』編集長。1940年、東京生まれ。早稲田大学教育学部卒。『週刊ポスト』など各種雑誌編集長を歴任。小学館取締役を退任後、食道がんになったが、食事や漢方薬を組み合わせた薬食同源療法「ホリスティック療法」で「ガン」を切らずに延命して10年。著書には、『母はボケ、俺はガン』(日経BP社)、『しなやかな玄米食』(太陽企画出版)、『帯津良一のガンに打ち克つ』いのちの手帖(二見書房)など多数。近著は歴史ノンフィクション評伝『大正靈戦記 大逆事件異聞 沖野岩三郎伝』(書斎屋)。中国・長春中医药大学名誉教授でもある。